

## [COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>  
E-mail:comm.tko@nsk.org  
PHONE:03-3433-0987  
FAX:03-3433-8678  
Diocese Office



第27号

(通巻1262号)

2015年12月20日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

## クリスマス・メッセージ

聖公会エルサレム大主教

エルサレム・中東教区主教 スヘイル S. ダワーニ

兄弟姉妹の皆様へ

私はこのメッセージを、ベツレヘムの馬屋の顕現（キリストの降誕）に向かって、共に旅路を行くものとして、平安な降臨節を願いながら、聖なる街エルサレムで書いています。

平和の王のメッセージは、私たちにとって大切なもので、私たちの地上での巡礼の間、黙想し振り返るのにとっても重要です。ここエルサレム教区においては、私は、教区の人々にそれぞれの宣教の振り返りを、状況が芳しくないことを知りつつ、求めました。

シリアでは人々が大変深刻な状況にあります。シリア・ダマスカスの聖公会の教会を閉鎖せざるを得ませんでした。一時的であることを望んでいます。ヨーロッパや他の国々と同様に、教会はヨルダンにおいても、もてなしの場として理解されていますが、難民の受け入れが困難です。見知らぬ人を迎え入れることは、キリストを私たちの中心に迎え入れることです（マタイ 25 章 35 節）。レバノンでも 11 月に壮絶な暴力を受け、慈悲深い心を持って応じることに困難を強いられています。そしてパレスチナとイスラエルは、日々パレスチナ人とイスラエル人の間で平和を求め祈るよう、呼びかけられています。

降臨節はキリストの来臨を準備し、主のみ姿が世に現わされるのを待ち望む時です。

平和の王は、仕えることを教え、望みがないと思われる時、希望をなくしてはいけずと聖霊を通して示されています。暴力に接する時、憎むことへ惑わされず、むしろ憐みの心を持たなければなりません。平和の王は、隣り人や共同体の中であって、何が癒しであるかを示しておられます。

私は日々、嘆く人々のことを祈り、慰めの（ヨハネ 14 章 26 節）聖霊が、彼らの心に慰めと癒しを与えてくださるよう祈っています。

エルサレムで守る祈りのうち、降臨節のはじめとクリスマスイブの特別な礼拝に、下に記す祈り（注）を、遠方の、また近くにいる友人たちを招き、共に嘆願し祈ります。この嘆願は、ここエルサレムで様々な問題がエスカレートする中で書かれました。そしてエルサレム教区で用いられていますが、紛争や痛み、苦しみがある別の地においても用いられるものと思います。

神がこの降臨節やクリスマスの季節に、皆さんが家族や友だちと共に祈られることを祈ります。神がどこにおいても皆さんのミニストリーを勇気づけてくださいますように。キリストがあなたの心に愛の種を蒔き、人生を通して（第 2 コリント 9 章 6 節）その愛が豊かにあふれ出ますように。

恵みと平和のうちに

（翻訳 教区事務所職員 塚田央子、広報委員会）

◇ ◇ ◇

・この英語の本原稿は教区ホームページに掲載いたします。

（注）この嘆願の祈りに関しては、別途教区から翻訳したものを送りますので、各教会で適時お使いください

## 2015 大畑主教に聞く アブラハムが召されたように

— 2015年は多くの意味で分岐点の年であったと思います。今年一年を振り返ってお伺いします

主教 10月に主教会が郡山で行われたのですが、最後の日に被災地を回りまわりましたが、福島第一原発の避難解除地域のギリギリまで行って訪問したことが強く印象に残りました。ゴーストタウンで誰の声もしない。「私たちの声は全然伝わっていない」と被災された方が語っていました。震災は5年経っても終わっていないし新たな問題が出てきている。日本聖公会の宣教を考えた時に「地球の命」というのはアングリカンコミュニオンの宣教5指標(註)の中にありますが、そのことをきちんと行っていく教区でありたいし、具体的には忘れないことが第一で、祈り続け、そこでの声を聴き続けていくことが大事だと



感じました。

— なかなか政治的な発言はしにくいですがね  
主教 戦後70年という節目であったとしても、小さい者の声を聴き続けなければならぬし、キリスト者として「正義と平和」が課題として重要であると思います。

— もちろん教会の中には政治的な発言はNOと言う人はたくさんいるけれど、それを恐れているのは戦後100年の時に「あの時ちゃんと言っておけば良かったよね」ということになりかねない。ではどうしたらいいのか、そのためには組織の再編成が非常に大事なのではないかと思っています。

— 誰かがやっていたらいいよというような教区ではなくて、自分たちが、もう少し自覚を持って関わっていく、すなわち私たち一人一人がキリスト者としてどう生きていくのか、が問われていると思います。

— では、教会はどのような課題をもって歩んだらいいのでしょうか  
主教 堅信と陪餐の問題、祈祷書改正を含め日本聖公会の課題は沢山あり、どこから着手すればいいのかわからないけれども、方向性としては宣教5指標を皆が心に留めておくこ

とができる教区であってほしいと思います。

我々は、誰かが、いつか教区がやってくれるというのではなくて、皆が行なっていくかといけなないと深く感じています。

— 私が定年になる10年後ぐらいまではどうにかなるかなと思うけれども、次の代の主教になったらもはや間に合わないのではないかという危惧を持っています。

— 教会の課題、例えば地域の貧困、社会の不正義に対して戦うのが、この地域の特性であると思うならば、それを推進する教会であってほしいと思います。

— 教会自身に変化に対して躊躇や反対が起こります。貧困など社会に関わろうとすると「それは教会のすることか」という声があります

— 主教 それに対して教区会の演説でも「変化を恐れるな」ということを言い続けてきたけれども、変化が起これないとなれば、これをどう「違う言葉」で語るかなのでしょうか。

— そういう意味で言えば再編成はどうなのですか  
主教 再編成はいい機会だと思っています。自分の教会がなくなるとか、統廃合という意識ではなく、自分た

ちの置かれている場所で何が必要とされ、何をすべきなのかをしっかりと考える教会グループ、エリアの分け方であってほしいですね。

— 手続き上の問題もあります。聖公会は完全なトップダウンではなくてボトムアップで受聖餐者総会といった決議を経なければならぬ。

— それで100年やってきて、ある一定まで増えたけれど、そこからは減少傾向であるというのでは大胆に変わらなければならぬ。でも、上からあなたたちはこれやりなさいと言われるのを待たなくても変化しようがない。

— 「宣教」という言葉自体が、同じ言葉を使っても意味が多様です  
主教 5指標だってそうです。だから全部が間違いであるとは言えないし、人を増やすということだってあります。だけど人を増やすためにはどういうことをしたらいいのかという時に小さな事かもしれないけれども人の思いに寄り添うような丁寧な牧会をしていく事が大切です。

— 今年8教会でエリアに分けて聖餐式をしましたが、トピックスでやるのではなくて、主目にするという方法もありますね  
主教 教区フェスティバルなら千人

が集まりますが、小さなグループだからこそ顔を合わせて自分たちのなすべきことについて考えていく機会になってほしいと思います。

— ただ地域の課題といってもわかりにくい。地域の課題・宣教は教区が上からではなくて自分たちが作り上げていかなければならない。リアリティの問題です。

— 本場に大事なものは「もう一回最初から更地にして作り直そうか」とか「心を合わせてやっていこうよ」というところに立って欲しいというのが私の思いです。それが10年後20年後に響いてくるでしょう。

— 英国のアバディーン教区に行ったときに、私たちはアングリカンコミュニオンの世界大の広がりの中で召し出されていることを確認できたのが印象深かった。アバディーン教区は小さな教区で伝統はあるけれど人数的には減っている教区で、塚田執事が行っている教会は当初20人前後だったのが今は平均50人くらいになっている。彼があそこにいること自体が大きな刺激になったのだと思います。教会の人たちが「自分たちが宣教に動かない」と言っていたのが印象的でした。自分たちの為すべきことが明確に見えることに教会は成長します。

— 目に見える範囲でも課題というのは山のようにあります

— 主教 その中で、一つでも丁寧にやろうとするときには、今まであったものでも一度止めて集中的に関わる、ということはあると思います。

— 既存の教会が変化をしない、変化を恐れるというのであれば別に新しいものを作ってしまうも良いのではないかという気がします

— 主教 自分たちの教会を守るためにどうしようかではなくて、そこでの宣教課題をするためには、どういう教会が必要か考えて決断してほしいなと思います。

— ただ資金の問題もあります。手弁当ではできません

— 主教 そこで統廃合が出てくるのでしよう。そこで資金を捻出していく。そして、ある時点においてはA教会、B教会、C教会がなくなると、D教会がまるまる違う場所に、その活動に特化していく。そこには司祭が数人いて信徒も聖職も自分たちの課題を考えていく。課題があれば、一人の司祭が関わる形で、最終的に教区は変わっていくのではないかと

— 終わりにメッセージを  
主教 総論賛成各論反対ということでは変化はできません。

— アブラハムが「行け」という神様の言葉に忠実にウルの地を出たように、神様の声を私たちはしっかりと聞いて神様が私たちにさせようとしていることを求めてやっていこうということに尽きると思います。

— 誰かのせいにしてもしようがない。それを脱却するための一歩は何か。まずは、きちんと礼拝を守っていくというのが基本です。



(聞き手・文責 広報委員会)

(註)

① アングリカンコミュニオン宣教5指標

② 神の国の福音を宣べ伝えること

③ 新しい信徒を教え、洗礼を授け、養育すること

④ 愛の奉仕によって人々のニーズにตอบสนองすること

⑤ 不正な社会構造の変革を追求すること  
⑥ 被造物を保全し、地球の生命を維持・更新するために努力すること

随想 「サンタクローズと子ども」

— 以前、あるキリスト教の保育園でサンタクローズの役を頼まれたことがあった。担当の保育士からはクリスマス会の最後に登場し、園児たちの質問に適当に答えて下さいと言われた。当日、子どもたちからは「どうしてサンタさんは赤い服を着ているの」とか「どうやってここまで来たんですか」とか「いつもは何をしてるんですか」などのかわいい質問があり面白おかしく答えていた。そんな中、一人の女の子から「サンタさんはどうして子どもたちにプレゼントをあげるんですか」という質問をされた。そのあまりにも分かりきったようで、考えたこともない質問に思わず口ごもったが、次の瞬間ある答えがひらめいた。それはこのような答えであった。「サンタさんは子どもたちにプレゼントをあげているだけじゃなく、もう一人大切な方にプレゼントをあげたいんじゃないかな。それがイエスさまなんだよ。でも何をあげたらイエスさまが喜ぶか分からない。ずっと考えていたある日聖書を読んでいたら、イエスさまは子どもたちが大好きだということが分かったんだ。それでサンタさんはイエスさまの生まれたクリスマス当日に、子どもたちにプレゼントをあげて、その喜ぶ姿、その笑顔をイエスさまにプレゼントすることにしたんだよ。」だいたいこんな感じの答えだったと思う。だがそれは自分でも予期しない答えで、まさに天から与えられた言葉であった。

日曜学校スタッフ連絡会 渡辺康弘

司祭と語ろう (特別編) 前編

主教 植松 誠

今回は、韓国から帰国直後の北海道教区主教及び日本聖公会首座主教植松誠師より、広報委員で貴重なお話しを伺った。

― はじめに、先生が牧師になられたのは、やはりお父様の影響なのでしょうが?

植松 皆さん、よくそのようにお聞きになって「じゃあ、お父様の跡をお継ぎになっただけですね」と仰います。私の祖父も父も司祭で私は3代目です。そうするとよく「お幸せですね」と言われますが、それを言われると今はそれほど感情的になることはありませんが、昔はとても辛くて、まさに私の中高生時代は親や教会に反発して過ごしました。



― とてもそんな風には見えませんが・・・  
植松 住まいは清里・長坂でしたが、大阪の大学に行ったのもそれだけ家や教会から離れたという思い

会から離れたという思いで飛び出したのです。だから決して順調に大学に行き神学校に入って牧師になつたというのではなく、いろんな出来事や迷いや葛藤もありました。父の跡を継いで牧師になつたというわけではないのです。  
― 大学では何を学ばれたのですか?

植松 大阪の大学での私の専門は音楽工学でした。卒業後、アメリカの大学院の言語障害・聴覚障害治療を専門とするコースに進み、将来はそちらの専門職に就こうと思っていました。

― それで、どうして牧師の道に進まれるようになったのでしょうか?

植松 やはり途中でお導き・お召しがあったということでしょう。具体的なきっかけを言うならば、特に留学中に行っていたオクラホマ州の聖マタイ教会で出会ったシニアウオーデン(信徒長)のロバート・ハ

イト氏との和解の出来事が大きかったです。(詳しくは「コミュニケーション11号」2頁の記事を参照)

― 私はその経験を通し、和解・癒し・救し・愛など今まで漠然と考えていたものが急にリアリティを帯びてきて、前からぼんやりと思っていた「神学校に行きたい」という気持ちがぐっと大きくなりました。まさに人生のターニングポイントになった出来事です。そして神学校に行きたいという希望を牧師に話すと早速主教と相談して、オクラホマ教区の聖職候補生として行くことを許してくれました。

― はじめはアメリカで牧師になろうとされたのですね  
植松 召されるところだったらどこでもよいので、必ずしもここに行きたい、あそこに行きたいという思いがあったわけではありません。

ある時ニューヨークのチャーチセンター(日本でいうところの管区事務所)から「アジア・アメリカミニストリーで働かないか」と

というオファーがありました。しかしその頃既に7年間アメリカにいて自分のアイデンティティクライシスに陥っていたのです。日本人であるということがだんだん薄れ日本語もおかしくなる。しかし言葉や価値観の違いもありアメリカ人にはなりきれない。真剣に悩み苦しんだ時期でした。

― そのアジア・アメリカミニストリーからのオファーは、シアトルやサンフランシスコといった日本人の多い町で日本人会衆のために働くということでしたが、やはり今帰らないと日本人であることが自分の中で消えてしまうという危機感が強く、日本に帰ることにしました。

― 大阪教区の司祭になられたことには特に理由がありましたか?

植松 当時、日本聖公会に属していない私は、どこかの教区に行くかということでは実は困りました。私の父は当時中部教区の主教でしたが、私は当然父の所に

「司祭のこの一冊」

『中東文化の目で見たイエス』

ケネス・E・ベイリー著

教文館 二〇一〇年

司祭 倉澤一太郎

第1章「イエス誕生の物語」は実に衝撃的でした。

著者ベイリーは考古学的手法からベツレヘムなどの山岳地域の庶民の家では、飼

い葉桶は家族の居間と家畜

部屋の境に置かれ、ゆりか

ごととしても使われていたこ

とを示し、ヨ

セフ夫妻が先客の泊まって

いた客間ではなく、家族団

欒の居間に迎え入れられた

ことを明らかにします。ま

た中東の慣習から考えて、

故郷に戻ったヨセフに宿の

提供を拒むことなどあり得

ず、むしろ総出でヨセフの

初子の出産を祝ったはずと

の主張は説得力に溢れま

す。中東の人びとの視点か

ら読み直すと、救い主の誕

生によって出会いへ導か

行く気持ちはありませんし、父も「受け入れない」と断言していました。そこで全教区の主教に手紙を出したところ、一番先に「うちに」と言ってく

さつたのが大阪教区の木川田主教でした。  
1982年9月に執事の私は牧師補として芦屋聖マルコ教会に派遣され、それから2年で司祭に按手された副牧師となり1986年までの4年弱を過ごし、それから大阪聖三一教会に牧師として赴任しました。

― その後、1994年日本聖公会総会で管区の総主事に任命されたわけですが、その時はどう思われましたか?  
植松 総主事は主教会が選任し総会が承認します。普通は前もって当事者には言うものですが、木川田主教は主教会の中で私に決まったということは何もおっしゃいませんでした。私はたまたま教区の聖職代議員としてその総会に参加していたのですが、その2日目の夜にある主教から「あなた

が明日指名されるよ」と

れ、隔てを越えた喜びの交わりに与った人びとが沢山いたことに気づかされ、心が熱くなりました。実に自分の視点を改めて見ることは思い込みから解放され、新たな世界へ導かれる機会となります。  
主イエスは中東イスラエルでお生まれになりましたが、キリスト者の多くは中東から離れた地に住み、聖書研究・理解も中東とは異なる文化背景を持つ人びとによって担われてきたため、私たちもこの流れの視点に囚われがちです。時に別の視点から聖書を読み直すことは、私たちが新しい出会いへと導く、お恵みの機会でもあります。慣れ親しんだ立ち位置に固執せず、時に視点を換え、視野を広げることの大切さを、喜びと共に私に教えてくれた一冊です。



『中東文化の目で見たイエス』ケネス・E・ベイリー著 教文館 二〇一〇年

聞き、とても驚きました。当時の植田仁太郎総主事の仕事を拝見して「これは凄い仕事だな」と思っていたこともあり、その夜は眠れませんでした。翌朝に大阪教区主教と大阪からの総会参加者でどうするか話しました。そうしているうちに前日首座主教に選ばれた八代崇主教と木川田主教から「受けてください」と言われ、自分の思いはいろいろあっても最終的には従いました。  
― その後、今度は北海道教区の主教に選出されましたが、その時のお気持ちはいかがでしたか?  
植松 主教選挙は本人に前もってある程度話があります。しかし私は当時44才で若すぎると思っていました。でも最終的に私自身はどう思っているかということとは関係ないです。選出されたという知らせは出張中のロンドンで聞き、とても驚きました。病氣療養中の八代首座主教からも電話があり「あなたに決まったから受けるべきだ」と言わ

れました。幸い2週間ほど海外出張が続いていたので、行った先やアメリカの私に通った神学校のチャペルで黙想する時間もありません。  
― 日本に帰ってもすぐには受けることはできませんでしたが、前任の天城主教が「早く決めてください。あなたが受ける」と言ってくれたら教区会で報告できる」とおっしゃるので、引き伸ばしてはいけないと決断し、お受けすることにしました。  
― お話を聞いてみると本当に意図しないところにどんどん導かれていくという感じですね  
植松 神学校に行くとか、執事や司祭に按手される時には志願を出すのですから「自分が」という思いがあります。しかし主教按手にはそれは一切ありません。い



植松 管区によって首座主教・総裁などの総裁主教は自分の教区を持っていませんが主教達への監督権を持っています。日本聖公会の場合はそのような規則はありませんから私は北海道教区の主教をしながら首座主教をしているということになります。(以下 次号に続く)

# ようこそ練馬聖ガブリエル教会へ



**教会ビジョン**  
 創立80周年を迎えて  
 今から10年前、創立70周年に作られた教会ビジョンを振り返る中で、『信仰の継承』と『地域社会との開かれた関係』が、これから大切にしていきたい方向性として出てきました。この2つに共通することは『宣教』です。神様の声に耳を傾け、『喜び』をもって、日々生きていくこと。「伝えなくては」という義務感ではなく、自分が神様から多くの愛を受けていると知り、それを感じたとき、その喜びを自分の周

りの人に「伝えずにはいられない」または、「自然と周りに伝わる」。  
 そんな生き方が宣教の第一歩ではないか。そのような考えをもとに教会内で語り合う中で、「神様の声は直接聞こえることは少ない。かえって、人との関わりの中、神様の声は聞こえてくるのではないか。」という声を多く聞きました。そこから見えてきた私たちが大切にしたいこと。「相手が大人、子ども問わず、一人ひとりを大切に、愛を持って向き合い、その人の声に耳を傾けることを通してその人と出会う。それを通して神の声に、神の愛に



【ビジョン宣言】  
 教会創立80周年を迎えた練馬聖ガブリエル教会は、「イエスの愛のうちに生きる」共同体として隣り人とともに歩みます。  
 【信仰告白】  
 神はわたしたちを深く愛し、わたしたちの間にイエス・キリストを送ってくださいま

した。支給額については、各教会代表による幹事会にて決定されます。  
 会の運営は、皆様から奉げられる献金によって行われています。モニカ会の財政状況については、2015年の決算および2016年の予算が確定したところで、教区ニュースにて皆様にお知らせできるようになりました。どうぞ、よくご覧頂いて、今後ますますのご理解ご協力を頂きますようお願いいたします。  
 私たちモニカ会の働きは、神学生への援助に限定的ですが、教区の「信仰と生活委員会」や「聖職養成委員会」などの働きとも連携し、協働しながら、聖職者を志す方の支援の充実を図りたいと考えています。  
 最後に蛇足になりますが、モニカ会のお知らせは一昨年末までは、モニカ会の費用で年2回作成していましたが、経費削減のため、広報委員会にお願いし、コミュニケーションおよび教区ニュースでのお知らせとさせて頂くことを報告させて頂きます。  
 (阿佐ヶ谷聖ペテロ教会信徒)

【ビジョンの実現のために】  
 1 日々の祈りと聖書のみ言葉により神の愛を確認し、聖餐式を通して神の愛にあずかります。  
 2 人々との出会いを通して神に出会い、与えられた神の愛を共に分かち合います。  
 3 神の愛を必要とする人々に仕えて神の愛を伝えます。  
 【未来に向かって】  
 わたしたちは、神の平和と正義をこの世に実現するために遣わされ、喜びにあふれる信仰を未来につなげていきます。  
 教会ビジョンの実現に向けてガブリエル教会は歩んでいきます。  
 (ペテロ五十嵐潤)

《信徒リレーエッセイ》  
 祈りのパートナーシップ  
 聖マーガレット教会  
 海宝 良子  
 私たちの教会は、2007年から秋田県にある東北教区大館聖パウロ教会と姉妹関係を結んでいます。今年110周年の礼拝を捧げた歴史ある教会です。  
 「祈りのパートナー」として、週報や月報、広報誌などを交換し、祈り合うことを大切にしてきました。時にお互いの教会を訪ね、共に礼拝を捧げます。夏の訪問は恒例となり、故郷に帰ったように迎えてくれます。聖パウロ教会は、主日会衆が15人程ですが、支え合って礼拝を守る姿や、子どもたちの祈りから多くのことを学ばれます。  
 東日本大震災後は、釜石の仮設住宅での座布団支援等のプログラムを共に行なってきました。歴史も環境も異なる二つの教会が寄り添い励まし合って活動を続けられることは、何にも代えがたい貴重な体験となっています。

## モニカ会便り

聖公会神学院校長  
 司祭 佐々木 道人  
 神学院で頂いているモニカ会よりの寄付金は、学生の年度を通しての主日の教会実習のため30万円支出されております。2015年度の教会実習先は以下の通りです。  
 「浦和諸聖徒教会」、「神愛教会」、「聖オルバン教会」、「聖パトリック教会」、「月島聖公会」、「小金井聖公会」、「東京聖マリア教会」、「東京聖十字教会」これらの教会の聖職信徒の皆様には大変お世話になりました。  
 また夏期実習（7月27日より8月14日の3週間）には約70万円支出されております。今年の夏期実習先は以下の通りです。  
 北海道浦河「へてるの家」  
 北山道浦河「へてるの家」  
 榛名「新生会老人ホーム」  
 東京山谷「きぼうのいえ」  
 九州教区「長崎聖三一教会」

て、大変貴重な機会です。その働きのため、モニカ会の寄付金を用いさせていただきます。心より感謝しております。有難うございました。  
 聖職候補生および聖職候補生志願者への援助  
 副会長 木島 出  
 この「コミュニケーション」をお読みの方は、少なからず教区の働きに関心をお持ちのことと思います。当然、モニカ会の働きについてもご存知とは思いますが、改めて会の目的を記します。会則第二条（抜粋）では、「1. 東京教区主教の許可した聖職候補生および聖職候補生志願者で原則として聖公会の神学校に在籍する者に対し、奨学金を支給し、候補生が勉学に専念できるように、物心両面から後援する。2. 東京教区神学生育成に関する機関を対象として、必要に応じて支援を行う。」となっております。今年度も2名の神学生に月額5万円の図書費と、聖公会神学院に対して100万円の寄付をいたしました。

後期信徒黙想会報告  
 司祭 佐々木 庸  
 聖職養成委員会主催の後期信徒黙想会が、10月11、12日に渡り、イエズス会無原罪聖母修道院（黙想の家）で開催された。参加人数は大畑主教を始め13名で講師の菅原裕治司祭、聖職養成委員7名を含むと総勢22名であった。  
 全体のテーマは「聖職への関心と理解を深めるために」であるが、今回は「聖書に見る召命」という主題で講話・説教をしていた。その中で菅原司祭は「召命」とは「聞くこと」であり、広狭主観的、客観的「召命」があるという観点から旧約・新約で示されている「召命」を熱く語り、参加者を深く黙想の世界へと導かれた。  
 また膨大な聖書の世界を専門的な立場から「イエスは天地創造の初めから終わりまで、人々を命へと招いておられ、人間の失敗をも超えて示される神の恵みと愛に満ちた召命が描かれている」と語られ、参加者一同深い感銘を受けた。



前回以来、分かち合いの時を持ち、今回は講師との面談は行なわず、朝夕の礼拝等も最終日の聖餐式に限り、黙想に集中することを大切にしました。黙想のために建てられた建物と携帯やスマホを手放した静けさの中での沈黙、神とだけ対話し、記録することを最初に勧められての1泊2日だった。  
 参加者からは「黙想会が年ごとに着実に進化しているのを感じる」とか「黙想がだんだん分かってきた」、「講話は難しかったが『召命とは何か』に向き合うことができ、少しづつ理解できた」との声もあつた。また、アンケートによれば、内容がよく理解できた」という回答が大半を占めた。非常に良い環境の中で時間を過ごすことができたことを評価する反面、黙想の時間がもう少し多く「分かち合い」の時間を増やして欲しいとの希望が寄せられておりスケジュールの時間配分が今後の課題として与えられている。

「女性」が教会を考える会  
 ～25周年を迎えて～

小林 幸子

「女性」が教会を考える会の25周年を迎えるの感謝の会が、去る9月18日に管区と聖バルナバ教会で開かれました。

第1部は、感謝礼拝と振り返りを、そして第2部は景山恭子さん（NY在住）から、「一信徒としての歩み」を話して頂きました。

「神さまの夢に参加する一人ひとり、他の人に対して大切な神の言葉」である。現在、「人種差別と取り組む委員会」（米国聖公会NY教区）で活動されています。公民権法制定から50年、同教区では聖職者はこの委員会の訓練を受けなければならぬそうです。自分の中にある差別と向き合い、偏見に気づくことが、あらゆる差別の克服に大切なのです。

「女性」が教会を考える会は、25年前に「女性にも聖職志願の道を開いてほしい」という声を聴き、この願いを共有したことから始まりました。閉じられた扉

を新たに開いていくこと！目指したのは、「新しいパートナーシップを通して教会に豊かな生命と働きを」でした。その後、女性の視点からの聖書の読み直しを通して、日本聖公会に与えられている課題に取り組み運動体となっていきました。

教会のすべ

ての働きに男女の別なく、神の召命に応じる道が開かれること、この実現のため、に講演会、学びの会、祈りの会などの活動をしてきました。わたしたちの祈り集「こころ



を神に」を発行し、礼拝に用いています。日本聖公会総会や教区会にも働きかけました。1992年からの聖公会「女性」フォーラムは、教会の中で女性が経験する問題について率直に話し合い、聖書を学びながら課題を共有する集りです。1998年総会で法規改正が可決され、女性の司祭が

実現。やっと女性たちはスタート地点に立ったと言えます。先達の多くの女性たちの働きの礎があり、多くの涙の問いかけと働きがあつて実現したのです。ところが、これ以後も教会の中の「平等な弟子たち」となるた

めの奉仕の道は、痛みや困難を伴っています。

25年経った今も女性たちは、「教会に真に豊かなパートナーシップを」と祈り続けているのです。

この会が「女性」と表示する理由は、性的少数者の方と連帯し、教会により幅広い人々の奉仕の道の実現をとの願いからです。強制的無い、話し合える、ゆるやかで温かい絆の群れ、そのような小さな任意団体です。これからも日本聖公会の中の「女性」・ジェンダーに関わる宣教の課題

を担いたいと願っています。この25年を導かれた神さまに感謝し、支えて下さった皆さまにも心から感謝いたします。

（東京聖三一教会信徒）

〔訂正〕前号の「コミュニケーション・秋号」に誤記がありましたので、お詫びして訂正いたします。

6頁1段目4行目

誤 第7回 ↓正 第1回

6頁2段目末尾

誤 斎藤 ↓正 斎藤

編集後記

今回は、クリスマス号にふさわしく豪華に主教3名の揃い踏みとなりました。メッセージをいただけたことを感謝いたします。読者の皆様いかがでしたでしょうか。

広報委員一同、よりよい紙面作りを目指して、来年も頑張りますのでご意見、ご感想など教区事務所宛て広報委員会までお寄せ下さい。

次回「大齋節号」

2016年2月14日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（二十二）

1. 働き手が少ない？

イエス「私が言った“収穫は多いが、働き手が少ない”というのは間違っていた」  
 ペトロ「どう間違っていたんでしょうか」  
 イエス「収穫もあり働き手もいるが、ちゃんと働く人が少ないだけだ」

2. クリスマスの日に

信徒A「こんど教会の近くに食堂が出来るんだけど、ちょうどクリスマスの日が開店らしいよ」  
 信徒B「そうか、まさに“メシア（飯屋）”の誕生だね」

3. 新・足あとの詩

信徒A「あの有名な“足あとの詩”を知っているかい」  
 信徒B「あの感動的な詩でしょ“ある人が主と共に歩く浜辺に所々1組の足あとしかないの、なぜかと聞いてみたら、その苦しい時期は主が彼を背負っていたからだ”という詩だよ」  
 信徒A「そうそう、ボクもそれと同じ夢を見たんだ」  
 信徒B「君のことだから、1組しかない足跡がいっぱいあったでしょ」  
 信徒A「いや、不思議なことに、手のあともいっぱいついてたんだよ」  
 信徒B「手のあとが・・・」  
 信徒A「そう、それで主に聞いてみたら、お前を背負ったとき、重すぎて思わず何度も手をついたんだって言われたよ」